

“ Sharing ”

今 泉 信 宏

‘ Sharing ’という英語の言葉がある。「分け前」とか「分かち合い」と訳される。2 - 3人が談笑しているところに、誰かが入ってきて“ Share!”と言う。これは「私も仲間に入れてくれ」という意味。しかし、実は“ Sharing ”の真の意味は「分かち合いにはある程度の痛みが伴う」ことを言う。「痛み」は通常肉体的な痛みを指すが、それより「精神的な痛み」のほうが多いのではないだろうか。アメリカンパイが一つあるとする。10に切ると10人がパイにありつける。しかしこの10を50人、いや100人が食べようとするとうなるか。自分の一切れ（分け前）の何十分の一か何百分の一しか食べられなくなる。ほとんどがパイを「味わう」ことすら出来なくなる。しかしこれが「痛み」であるのだ。つまり「自分が大切にしている一部分」を他のために犠牲にする。「犠牲」と言えば否定的に聞こえるが、一人一人が皆自分の大切な「share」の一部を他と分かち合って生きていこうとするならば、社会も世界も変わる可能性が出てくるのではないだろうか。問題は人間が自分のshareのみならず他のshareまで自分のものにしようとするところにある。

私は毎年二回25～30人の学生をフィリッピンへワークキャンプのため引率していく。

5日間の猛暑の中での過酷な労働で家建築に従事する。「家」といっても、側溝を掘り、砂利とコンクリートを流し、その上に簡素なブロックを43段積み上げ、コンクリートで固め、最後にトタンの屋根を乗せる真に先進国では考えられないような簡素な「家」である。5日間私も学生と新しいホームオーナーと共に汗を流し労働の大切さを体験する。そして出来上がった「家」に入るためにDedication Ceremony（神がこの家を与えてくださったことに感謝をする）を行う。学生たちは新しいホームオーナーに家の鍵と聖書を手渡し、家が温かい家庭になることを祈る。声が震えて言葉にならないときが多い。それでも学生たちは力いっぱい感謝と希望をホームオーナーに託するのである。非常に感動的なシーンでもある。私は今回で21回目、学生の中にも5・6回目の者もいる。何度行っても感激を忘れることはない。5日間の過酷な労働をshareする間、肉体的また精神的な「痛み」があるが、それがあるからこそ、新たなホームオーナーが生まれ、そこに温かい家庭が築かれていく。

フィリッピンは国中が貧しい。しかし学生たちはホームステイで家庭の温かさを体験する。互いが互いのことを思いやる。貧しい地域では共存、共生の地が出来上がっているのである。つまりsharingしていかないと生活ができないのだ。学生たちはこのことを目の当たりにして帰ってくる。そして「まことの豊かさ」とはいったい何なのかを改めて問い直すのである。私はこういった学生たちが、豊かな社会で生きていこうとする中で、他との「まことの分かち合い」を体験したがゆえに、社会で、世界で活躍し、もっともっと一人でも多く「痛みを伴うsharing」を実践していけるように願いつつ学生と日々を過ごしている。

（総合政策学部宗教主事）